

はじめに

「漢字で教育」

石井式漢字教育の本質を振り返る

……賛成と反対の中で

「幼児にとっては、漢字はかなよりずっと覚えやすい」こと、そして「鳩は鳥よりも覚えやすく、鳥は九よりも覚えやすい」ということの発見から、幼稚園で漢字教育を行うべきであることを主張したのは、昭和四二年のことです。

幼児には、漢字教育が絶対に必要です。漢字は、何よりも幼児の能力を大きく開発する力を秘めた道具であり、しかも、幼児は漢字を学ぶことによって失うものは、何一つありません。それらのことはすべて十分に証明済みです。

ところが、それが一般にはなかなか理解されません。また、教育界を指導する学者たちは、私の発表を素直に受入れることが出来ないのです。

最初は、たった一つの幼稚園の実践から、それも全く四面楚歌の中で始められたこの教育が、今は亡き井深大^{いぶかまひろ}会長の下に幼児開発協会が創設されることにより、多湖輝^{たこあきら}先生、鈴木鎮一^{すずきしんいち}先生始め、多くの先生方の賛同と支持を得て、今や全国に広がり、数多くの幼稚園、保育園で実施されるまでに発展して来たことは、実に感慨深いものがあります。

1. 幼児の漢字教育は“適時教育”

……早期教育でも英才教育でもない

私の提唱する“幼児の漢字教育”は、早期教育の一つだと思っている人が多く、英才教育の一つだと思っている人も多い。いずれも間違いです。

コラム 部首

寸

古い形は手の象形に脈所の位置を示したなかくんのしるしを加えた指事字。手首から脈所までの距離を短い長さをはかる時の単位とし、これを「寸」と言う。一寸の十倍を一尺、十尺を一丈。

部首としては“基準”“きまり”の意味。また単に“手”(又)の意味に使われることも。

【導】 “頼るべき基準(寸)に従って人を道びく”こと。

英才教育は大切であり、必要だと考えている私ですが、これは英才教育では絶対ありません。早期教育に至っては、私は大反対なのです。その大反対の早期教育を主張するわけがありません。教育は、遅過ぎてもいけません、早過ぎてもいけません。教育には、その内容によって、それぞれを学習するのに最も適した時期があるのであって、それより早めて成功することはあり得ないのです。

幼児の漢字教育は“適時教育”です。幼児期が、一生のうちで最もやさすと漢字が覚えられる唯一の時期で、この時期を外すと漢字学習が困難になります。今、学校の漢字教育がうまくいかないのは、漢字学習の適時期を逸したためなのです。

ところが、この事実が今までの常識とあまりにもかけ離れているので、多くの人がこの事実をなかなか信じません。「自分が小学校や中学校で苦しんだ漢字が、幼児にやすやすと覚えられるわけがない」というわけです。

私を含めて、世の人々は適時期を外して漢字を学習してきました。だから、「漢字は難しい」と心の底からつくづくと思うのです。

幼児の早期教育(実はやはり適時教育)の先駆者である鈴木鎮一先生のバイオリン教育でもそうでした。

まず、「幼児にあの難しい曲が弾けるわけがない」と言って否定しました。ところが幼児が見事に弾くのをみると、今度は「幼児にあの曲が理解できるわけがない」と言うのです。「大人に難しいものが、幼児には容易に出来る」ということは、このように解りにくいのです。

鈴木先生は、ドイツ留学中、ドイツの子供たちがドイツ語を自由に話しているのを見て、その教育法を発見されたといいます。母国語の学習は、幼児期だから易しく習得できるのです。成人してから学習するのだったら、外国語の学習と同じで、難しいものになります。

【尊】 “酒を入れた酒器を捧げ持って、神または貴人にそなえる”ことを表した字。古い字形は𩇛で、両手で酒がめを捧げている形。酒を供えるのは相手を“たつとぶ”心の表れであるところから、“たつとぶ”を表した。

コラム 部首

寺

土と寸との会意形成字。士は“役人”の事なので、寺は役人が決まりに従って、物をとりきめるところ、つまり“役所”が本義。中国に初めて仏教が伝来したとき、僧に役所を住居として与えたので、僧のいる所を

これも、「大人には難しいことが、幼児には容易に出来る」ことの一例です。しかし、これでもまだ「漢字学習は幼児期には易しい」ことが信じられないという方には、それを証明する徹底的な事実を披露しましょう。それは、「幼児は、言葉がまだ覚えられないうちから、漢字は理解でき、覚えられる」ということです。

●……漢字は言葉よりも覚えやすい

一歳半の赤ちゃんだったら、普通、「うんま」「まんま」「てーて」「たーた」というような幼児語が三〇〜四〇語言えるのがやっとです。ところが、私が提唱した方式により、生後十か月頃から漢字カードで漢字を教えられた田中庸介君と又吉孝旨君は、一歳半の頃には、三百語の漢字を理解し、読んだのです。

二人とも私がそれを確認したばかりでなく、庸介君の場合は朝日新聞東京本社の記者が、孝旨君の場合は沖縄タイムスの記者が、それぞれを確認し、各新聞紙上にこれを報道しました。明らかに、幼児にとつては、漢字の方が言葉よりも覚えやすいのです。

それは信じがたいくらい意外なことに思われるかもしれませんが、よく考えてみれば、どなたにも納得できる理由があります。その第一は、言葉は口から発せられると同時に消滅してしまうので、発せられた瞬間にこれを捉え、かつ覚えなければなりません。

しかも、言葉は、いくつもの音声が一定の順序に並んで組立てられていて、最初の音声の正体さえはつきりと掴まえられないうちから、次々に飛び出てくる異なった音声を、その順序を違えずに受取り、かつ頭の中に貯えなければならぬのです。

さらにその上、そういう音声の一定の連なりを聴覚中枢に貯える一

「寺」と呼ぶ習慣が生まれた。

【持】 “きまり(寺)を手にもつ”という意味で、“まもる”こと。それは長く続けなければならぬので“たもつ”意味にもなる。

【詩】 “きまりのある言葉”という意味の字で、文章の表現の上で、一定のきまりがあるものを言う。

【等】 “竹簡たけくだをきまり良く整理する”という意味で、“順序だてる”が本義。そこから段階(等級)の使い方が生まれた。

方、それに対応する意味内容（多くは視覚的な存在）を別の感覚中枢に貯え、この両者を連絡させなければなりません。言葉を覚えることは、このように大変な仕事なのです。

これに比べたら、漢字を覚えることなどお話にならないくらい易しいのです。例えば、“花”という漢字は、その内容である花そのものと同じ視覚的なもので、記憶に納まるまで、決して消えることなく待っていてくれます。だから必ず覚えられます。

また、言葉は時間的に連続した信号なので、それを聞いている間は一瞬の油断も許されません。途中の音声を一つでも受取りそこねたらおしまいです。ところが、漢字は、一瞬のうちに把握できる空間的な図形で、しかも、その図形が頭の中に確実に納まるまで待っていてくれるのです。

だから、言葉だと三〇か四〇しか覚えられない幼児が、漢字だとその十倍も覚えられます。

●……漢字は視覚的印象が強い

言葉の覚えられない、重度の脳障害児を指導したことがあります。物と、その物の名を表した漢字カードを一緒にして置き、漢字がその物の名前を示す符号であることを教えます。例えば、花瓶の花に“花”という漢字のカードをぶらさげておき、“花”が花を表していることを教えるのです。このような漢字カードを数枚教えた後、それぞれのカードを物と対応させて置く仕事を課します。すると、それまで全く光のなかつた目をきらきらさせてこれをやるのです。このような子供も知的な作業は喜んでやるのです。

このような学習を、毎日、繰返し、繰返しやらせていると、ある日、突

コラム 同音異義語

はな

「花」と「華」と「鼻」

【花】 化と草との会意形声字。化は、人とヒとの会意形声字。ヒはヒで、人の倒れた形を表したもので“死ぬ”こと。よって化は“人が死ぬ”こと。死は大変化なので“かわる”意味に使われ、死

んで“化ける”という意味にも使う。花は、言わば“草のお化け”

【華】 艹と垂の会意字。花の美しく垂れた形を表している。花の古字。現在は“草のお化け”の「花」の方が多く用いられ、「華」は“花やか”のこと。

然、花を指さして「はな」と言い、「花」という漢字カードを指さして「はな」と読むようになります。易しい漢字の学習が、それより難しい言葉の学習を成功に導いたのです。このように、漢字の学習は、言葉の学習を容易にする効果があるだけでなく、言葉の理解を深めたり、記憶を確かなものにするのにも役立つのです。

例えば、「時刻と時間」という言葉を漢字で学習すれば、その理解が正確で、かつ深いものになります。だから、漢字で学習した子供たちは、「明日の遠足の集合時間は八時三十分！」という教師の言葉の誤用を決して聞き逃しません。

古語で、物の突き出た所を表す言葉に「はな」という言葉があります。「端」という漢字がこの言葉の意味を表しています。「鼻」は、顔の中に突き出た所なので「はな」と呼んだものでしょう。

同様にして「花」も、草木の茎や枝の突き出た所に咲くものなので「はな」と呼んだのでしょう。つまり、「鼻」は「顔の端」であり、「花」は「茎や枝の端」であり、端と花と鼻はもとは同じ言葉だったのです。

それを漢字で表す際、使い方の違いによって、これを区別して表した方が判りやすい、ということ、それぞれ別の漢字を当るようになったのです。それが今では、字が異なるために、同音異義語のように思われています。

“橋と箸”“釜と鎌”“齒と葉”のような同音異義語も漢字と共に学習した方が解りやすく、かつ記憶に留まりやすいのです。聴覚的な言葉に視覚的な文字を関係させて記憶すると、言葉だけでする記憶の六倍半の記憶効果がある、という調査結果もあります。

昔から「百聞は一見に如かず」と言われているように、視覚的印象が聴覚的印象よりも強く優れ、効果の大きいことはだれでも認めるどころです。従って、その視覚と聴覚と結び着いた記憶が、聴覚だけの記憶よ

【鼻】 自は鼻の象形で「はな」が本義であるが、自分を指さす時に鼻をさすので、「わたくし」という用法が生れた。ちなみに「私」は。わたくし いね“ムいねの禾”という意味で“自分”のこと。「ム」はしで鼻の象形で自と同音同義。つまり、鼻は、自が“私”の意味に転用された

ために、𠂔(毘)を加えて作った形声字である。

りも強固なものになることは、言うまでもないでしょう。

ところが、わが国の小学校では、“じかん”“じこく”というような“かな”表記で言葉の学習をさせています。表音文字であるかな表記では、“時刻”“時間”のような視覚文字の効果が出てきません。だから、時刻と時間間の概念の違いを教えているのにもかかわらず、理解が浅いため、すぐに両者を混同してしまうのです。

2. “漢字で教える”漢字教育

●……真の漢字力を付ける

以前、講談社から刊行した『一年生でも新聞が読める』という本で、

「小学校一年生の漢字教育は、“漢字を教える教育”であってはならない。
“漢字で教える”教育でなければならぬ」ということを説きました。

それは、学習心理学で言われる「覚えようとしなくて覚えた記憶はいつまでも残るが、覚えようとして覚えた記憶は必ず失われる」ということに拠ります。

例えば、試験のために覚えようと努力して覚えた記憶は、試験が済めば覚えている必要がなくなるので自然に忘れられてしまう、というのが頭の本来の働きです。覚えるのが頭の働きなら、忘れるのも頭の働きです。だから、漢字学習を、覚えようとして覚えさせてはいけないのです。例えば、「試験をするから漢字をよく覚えて来なさい」というような形で行う学習では、試験が済めば忘れるのが当たり前です。これでは、「忘れるために漢字を学習する」ということになります。事実、どの学校の教師でも、「テストの時には漢字が書いても作文やノートにはその

漢字が書けない」と言っていて嘆いています。「作文やノートに自然と使える」ような漢字力でなければ、真の漢字力ではありません。

母国語の学習では、だれも「教えよう」と身構えて教える者はいないし、「学ぼう」「覚えよう」と努力する者もいません。それでいて、だれもが母国語に熟達するのです。それは、母国語が語られる実生活の中で自然と耳にし、耳にしている間に自然とそれを理解し、覚えてしまうからです。

こうした教育法を、従来の「漢字を教える」漢字教育に対して、「漢字で教える」漢字教育といえます。「漢字で教える」漢字教育は、あらゆる領域の教育を「漢字で」行うだけのものであって、子供が漢字を覚えようが覚えまいが、それは問題にしません。

●……“漢字で教える”効果

この“漢字で”ということを、具体的に述べてみましょう。「手を洗う」という生活指導の場だとします。まず黒板に「手を洗う」と書きます（園児たちは皆これらの字を全く知らないとします）。

幼児たちは好奇心が強いので、何を書くのだろうと思ひ、いたずらしている子でも黒板に目をやります。知らない字なので、「何だろう」と疑問に思います。

そこで子供たちに向って、黒板の文字を指さしながら、「今日は、“手を洗う”。“手を洗う”ということで、大切なお話をします。皆さんは、どんな時に“手を洗いますか。はい、だれか言える人？」と発言をうながします。

黒板の字は何という字か説明しません。子供たちとの話のやりとりで、

“手を洗う”という言葉を使う時だけ、いつもこの字を指さして、“手を洗う”と言うだけです。ただこれだけのことで、幼児たちは“手を洗う”という字を覚え、読めるようになるのです。次の日、“手を洗う”という字を手洗い場に掲示しておけば、子供たちは皆何のためらいもなく読みます。

この場合最も大切なことは、漢字をさり気なく指さして読むことです。“漢字を教える”という気持を全く持たないことです。教師が問題にすれば、子供たちも漢字を意識します。そうなれば真の漢字力は身に付きません。

“漢字で教える”という漢字教育は、真の漢字力を養うために考え出された方法ですが、この教育を実践している間に、だれの目にもはつきりに見えるようになった大きな副産物があることが判ってきました。

この教育法の実践を始めた幼稚園や保育園から、次のような驚きの声を聞いたのです。「この教育を実践してわずか数か月にしかならないのに、従来の教育では得られなかった大きな教育効果が見えてきました。それは、幼・幼・児・た・ち・の・集・中・力・が・著・し・く・強・ま・り・、・社・会・性・も・ぐ・ん・と・伸・び・、・道・徳・性・が・向・上・し・た・こ・と・で・す」というものでした。

それで、この教育がなぜ幼児をそのように著しく向上させるのか、その理由をいろいろな面から考察してみました。その結果考えられたことは「目と耳とで受容した記憶は、耳だけによる記憶の六倍半も強い」ということです。

他の幼稚園や保育園では、文字は幼児に読めないものとして、言葉により幼児の耳に訴えるだけですが、“漢字で教える”教育では、同時に幼児の目にも訴えることになるので、幼児は目と耳とを働かせて学習します。これが第一の理由です。

次に、幼児というものは、目を絶えず動かし遊ばせていて、そのため、

コラム 部首

且

地上に物を積み上げた形を表した部首。“積み重ねる”のが本義。

【査】 “記録（書類）を重ねる”ことで“しらべる”という意味を表したもの。

【祖】 なくなったおじいさん、ひいじいさん、そのまたおじいさんを言う。“不”は神様に関する部首で“祖”は先祖代々の神様ということ。

【組】 何本もの糸を組合わせて編んだ“くみひも”が本義。今はくむことに限らず“くみ合わせる”意味の

心も絶えずそれに伴って遊び動いています。だから、幼児の耳は「聞けども聞えず」という状態にあることが多いのです。大切なお話や注意が、幼児の心に届きにくい、というのはそのためです。ところが、常に“漢字で”幼児の目に訴える教育をしていると、幼児は、目を学習に参加させる習慣を次第に付けていき、目が自然と落着くようになります。

だから、先生のお話や注意が、よく心にしみ通り、教育効果が顕れるのです。このような理由で、“漢字で教える”教育を始めると、わずかの期間で、子供たちの集中力が強まり、社会性が伸び、道徳性が向上するのだと思います。

●……智能が向上する漢字教育

幼児教育者たちが幼児の漢字教育を受入れない理由は、「幼児期に漢字を習得しても小学校に進めば、幼児期に漢字を学習しなかったものど、全く同じになってしまう」という意見があることによります。

また、漢字教育に反対ではないが、実践を躊躇している人々がいます。それは、漢字が読めるようになった子供たちが、小学校に進んで、仲間よりよく出来るということで慢心し、学習をあまりしない子供になりはしないか、と恐れるのです。

このような人たちは、漢字教育に反対する人々よりも多くいます。そしてこれが、幼児漢字教育の普及を大きく妨げているのです。しかし、このような考えを抱くということは、教育者としても最も恥すべきことだと思えます。

“くみ”に広く使われる。

【助】 “力を重ねる”
という意味で“力を貸す”、つまり“助ける”
ことを表した字。

私はこれまで数多く幼児や小学生を直接指導してきました。“知っている”“出来る”ということで学習をしないでいる子が全くなかったわけはありませんが、それは極めて少なく、むしろ“よく出来る子”というのは、学習が好きで「よく出来るからもうやらなくてもよい」と言っても人一倍進んでやり、熱中してねばっこい子が多かったと思います。だから、「よく出来る子供ほど熱心に学習するものだ」と私は思っています。「よく出来れば必ず怠る」ということだったら、よく出来る子を作る教育は出来ないことになるのではないのでしょうか。「このような考えを抱くことは、教育者として恥ずべきこと」と先に述べたのは、それが教育否定を意味するからです。

よく出来ても、怠るところか、益々努力するように指導するのが、教育者の努めです。それに子供の本性は、よく出来れば出来るほど、一層やりたがるものです。だから出来るように初めにその基礎を養っておけば、あとは放っておいても進んでやり、向上します。

出来ない、人より劣っている、ということを自覚した子は、やる気が起らないものです。なだめ、すかし、励まして、気が沈んでいるから、うまく出来ず、益々やる気がなくなるのです。この悪循環を断つことは実に難しいのです。

幼児の漢字教育は、学習を好んでやる、益々向上して止まない子供を育てるのに最も良い方法だと、私は確信しています。繰返して言いますが、私の漢字教育は“漢字を教える”漢字教育ではなく、“漢字で教える”教育です。だから、漢字力よりも、「子供の智能が向上する」この教育法が、益々広がっていくことを期待しています。

コラム 部首

梟

品と木との会意字。
“木の上にたくさんの鳥がいて口をそろえてさえずっている”こと。
噪（さわがしい）の本字。

【操】

手と梟との会意形声字。“手をせわしなく動かす”“手を巧みに使う”“あやつる”ということ。